

「蒲鮮萬奴國號考」補正

岩井 大慧

- (6) Cathay and the Way thither Vol. I. p. 150, No. 2.
- (7) Travels of Marco Polo. Vol. I. p. 312.
- (8) Cathay and the Way thither. Vol. I. p. 143. 2nd Friar Odoric is "And Jugglers cause cups of gold full of good wine to fly through the air and offer themselves to the lips of who list to drink of it"と述べてゐるを参照すると、彼等の間には、此頃は觸鉢杯のみでなく、金製の杯も存してゐたのであらうと思はれる。
- (9) Cathay and the Way thither. Vol. I. p. 150-1, No. 2.
- (10) Lafter, Use of Human Skulls and Bones in Tibet. p. 5.
- (11) Encyclopedia of Religion and Ethics. Vol. 4. p. 511.
- (12) Waddel, Lhasa and its Mysteries. p. 243.
- (13) Rockhill, The Land of the Lamas pp. 260, 273.
- (14) Proceedings of the American Oriental Society. 1888.

昨年本誌第拾九號第四號に於いて、自分は蒲鮮萬奴の國號に關する鄙説を發表し、大方博雅の叱正を乞うた。問題そのものが、我が東洋史學界に論議懸案になつてゐたことによつてか、または七百餘年前、滿洲に存続した——それは僅か二十年間ではあつたが——獨立國であつたがゆゑに、偶々勃發せる今次事變、これに相繼いで生じた滿洲國の獨立といふ問題に關聯してか、その理由は奈邊にあるかは知らぬが、幸にも非常に學界の注目するところとなつた。京都帝大の羽田博士は、これを學生に課して演習に使用され、逐條、再吟味を了せられたと仄聞する。また支那に在つては、北平燕京大學教授錢稻孫氏は、これを教壇に講じられ、次いでその漢譯も既

に完了されたと報じて來た。これ等は自分としては、欣快これに過ぎるものはない、と同時に聊か背汗流漓を覺ゆる感なきを得ない。かやうに問題視された結果、一二先輩及び友人から懇篤なる高教を忝うした結果、少しく補正を要すべき點を發見し、また二三の質疑に應答すべき義務あるを感じたので、茲に餘白を借りて、少しく述べることにした。

「箭内博士の東眞説とその批判」の項

(本論第二章)

曩に自分は箭内博士の説を批判せる際、ラシットの集史に關し、洪鈞の「元史譯文證補」引用の條、自注 14 に於いて、「この東京王自立の記事は、洪氏の譯はシンヂン(BEREZIN, L. N., Sbornik letopisei, — Istorija Mongolov sochinenie Rasid Eddina. Sankt Peterburg, 1858-1888.) に依れるか、將たまたドーン(D'Ohsson, Baron C., Histoire des Mongols,

depuis Tchinguiz-khan jusqu'a Timour Bey ou Tamerlan. Amsterdam, 1852. 4 vols.) に據れるかを確めるため、原本にあたつて見たが、自分の瞥見したところでは、どうしても見當らなかつたから、恐らく何かこの二書以外のものから譯した部分ではなからうか(「拙稿」)と疑を存してゐいたところ、羽田博士の指示によつて、ブロシエーの譯した「ラシッド集史」に明記あるを知つた。これに憑つて自分の所説は益々鞏固となつたが、これに反して箭内博士の推論は全くその根據を失ふことになつたことは、誠に遺憾である。

いま所論を明瞭にするためと、その上この材料の出現によつて、種々嚴正に批判すべき諸點を生じたため、前回省略に從つた箭内博士の主張を引用し、次にブロシエー譯を紹介し、然る後に、卑見を添へることとする。

博士は洪鈞の「元史譯文證補」の「自立爲東夏王」作原

東京據
錄改正」を援用批判して、次の如く結論してゐる。

「是に於いて問題は萬奴の稱したる國號の事に
移るべし。證補の著者洪鈞は、原書に東京王と
あれど、親征錄に據りて東夏王と改正すと注す
ること、右の引用文に見る所の如し。

さて洪氏は萬奴の國號が東夏なりとする親征錄
及び元史の記事に就いて嘗て疑を挾まざりしが
故に、漫然として之を改めしのみ。然れども東
夏は東眞の誤なるべし、果して卑見の如しとせ
ば、洪氏の重譯せる原書は、即ちベレンジン譯の
ラシッドの集史には東京に相當する音字を以
て、萬奴の建てたる國號と爲しゝなり。余は未
だベレンジンの譯本を見るの機會を得ざれば、洪
氏の所謂東京の二字が果して原音を正寫したり
や否やを知ること能はずといへども、察するに
原音は當に Tung-ching 若くは Tung-chin な
るべし。果して然らば、洪氏が之に充つるに東

京の二字を以てしたるは必ずしも當らず、余
は、曩に論ずる所によりて萬奴の國號を東眞な
りと信ずる以上は、ベレンジン譯本にも、ラシ
ッド原本にも、實に東眞(Tung-chén)の二字を現
はすべき文字を用ゐたりしものと推測せざるを
得ず。換言すれば、ラシッド原文にも、ベレ
ジン譯にも、東眞とありしを、洪氏は全く東眞に
關する事實を知らざりしがため、之を以て東京
の音譯と誤解し、更に親征錄・元史等に東夏と
あるにより、漫然之を東夏と改めしに過ぎざる
べし。」(東洋學報第四卷第二號三〇六頁。大正三、六月。
蒙古史研究、四六—四七頁。昭和五、十月。)

と、自信ある斷案を下されてゐるのである。然るに
ブロシエ^{*}には、明かに次のやうに見えてゐる。

Le nom de 東京 Young-king que Rashid tra-
nscrit *ak chj*, se trouve dans un autre passage
de l'histoire de Tchinkiz; un général des Kin,
Tou Tchén Taishi 朮赤, s'y révolta durant

la campagne de Tehinkiz contre la Chine du Nord et s'y proclama *دك دك دك*, soit évidemment 東京王 “roi de Toung-king”, ce que Rashid traduit *دك*; bien que cette traduction soit incomplète, on voit que *دك* y est traduit *دك*, ce qui est bien le sens attribué dans le présent passage à *دك*, transcription de 京.

上記の「ロシヤ」の譯文中「*Tou Tchéou Taishi*」あるは、洪氏の「譯文證補」に「秃珠大石」と見えるものであることは、何人も領かれることであらう。それゆゑ洪氏譯本の依據せるラシットの原典も、ブ氏翻譯の底本となるラシットの原籍も、同一この條であることは疑ない。

そこで問題の「東京王」であるが、ブロシヤの指摘してゐるやうに、ラシットの譯は *Memleket* とし、possession, regne; royaume, empire; province, contrée, ville などと意をあらはする語(Zenker, Turco-Arabisch, Arabia-Persan

Dict. II, p. 830) で表はした爲めに、その意味がいろいろ白鳥博士に教

か、不完全になつてはゐるものゝ、この場合に於ては、「京」の翻字に外ならないことは、ブ氏の論證で明かである。そこでブ氏は *roi de Toung-king* と譯してゐて、決して箭内博士の推測されたやうに *Tung-ching* じゃ *Tung-chin* じゃ、將た又 (*Tung-chén*) じゃなす。前回も言へる如く、博士は先づ「東夏は東眞の誤なり」と決めてかゝり、「果して卑見の如しとせば」と論を疊みて進み、初め假設と建てし論の、未だ證明し了らざるに、何時しか確固不拔の定論となつて進論し、以て洪氏の訂正を「洪氏は嘗つて疑を挾まざりしが故に、漫然として之を改めしのみ」と難じ、また更に「洪氏は全く東眞に關する事實を知らざりしがため、之を以て東京の音譯と誤解し」と酷評し去つたことは、今日からこれを見れば、少しく輕卒で、餘りに大膽過ぎはしなかつたらうか、とちと考へさせられるのである。況や博士は

「余は、未だベレンジンの譯本を見るの機會を得ざれば」と告白して居られるに於いてをやである。而もそのベレンジンに記載無くして、プロシヤにあつたに於いては、猶更のことである。洪氏のために大に一言辯じてやりたい氣持さへする。洪氏が「東京を「親征録」によつて「東夏」と改めたことに就いて、先きに自分は材料尊重主義から、その非を難じてゐいた(拙稿)」。いまた重ねて同一理由によつて自分は材料の缺如せるところ、または未見の書に就いて、犀利なる頭腦の働きのみに頼つて、推測立論して行くことの、如何に危険で、慎むべきであるかを言ひ度い。自分とは目的及びその結論に於いては、全く違つた到着點に達しはしたが、池内博士が箭内博士のこの説を排して、「余は遺憾ながら此の説にも服する能はず」、(東洋學報、第拾貳卷第四號四、九八頁、大正十一年十二月)と結ばれてゐることは、誠に卓見と稱せざるを得なす。

* Brocquet, E. et Djami El-Tevarik. Histoire générale du

「蒲鮮萬奴國號考」補正

Monde par Fadl Allah Rashid Ed-din. Tarikh-i Mubarek-i Ghazani. Histoire des Mongols éditée par E. Blochet Tome II. Contenant l'histoire des Empereurs Mongols successeurs de Temükhiz Khaghan. Texte. Vol. XVIII. 2. pp. 466-497. Leyden, 1911.

「池内博士の東眞説とその批判」の項

(本論第三章)

先きに發表したとき自分はノートの不整理から、「東文選」の編者として李奎報の名を署して了つた。發刊と殆ど同時に氣付いたときに、顧みて自分ながらどうして、しか誤信して書いたかを疑ふ位であつた。「東文選」は人も知る如く、正續二編より成り、百五十四卷四十五冊に分れてゐる。正編は朝鮮成宗の九年、徐居正等敕命を奉じてこれを選輯し、續編は同中宗の時代に、申用溉等に命じて正編の完成以後四十餘年間に亘つて製述されたものを、選纂せるものに係り、上は新羅時代より、下は朝鮮の初期に

至る間の、諸家の詩文、書翰等を聚めたものである。それゆゑ左にこれを訂正し、^{*}筆者の粗漏を深謝し、讀者の寛恕を乞ふ次第である。

^{*}1 拙稿本文、18頁七行。「李奎報」を「徐居正等」と訂正する。

² 同19頁四行。「編者」の二字を削り、「李奎報」の三字はそのまゝ存す。

³ 拙稿22頁注18及び23「李奎報」を「徐居正等」と改む。

「萬奴の國號は大眞」の項及び（本論第六章）

「大眞の意義と東眞」の項（本論第七章）

昨年鄙見發表後間もない四月二十七日附私信を以て、朝鮮總督府修史官稻葉博士から、左の如き示教があつた。自分はこれを拜受して、感謝と敬意を表しつつ拜讀した。

拜啓（中略）今同東洋學報にて、大眞國號の御研究御發表被成下敬讀仕候、恰も小生擔當の高麗史萬奴との交渉時代に入り候爲め、一同にも精讀受益可致候やう申含め候、格外の御精到感佩

に不禁候、尙軒兄（筆者注箇内
博士の號）在天の靈も莞爾たること、存じ候。

小生の平素思案いたし候次第は、渤海國の後世長白山東西に及ぼせし歴史的事實に有之候處、何分にも文獻大半湮滅の爲め、未だ要領を得ず、修史上に多大の遺憾を覺え申候へ共、該國が震國と號せしこと、及び弓裔が摩震と稱せし次第は、双互に關係を有せざるかに御座候、摩は摩訶（大）の略稱、即ち大震に相當すべきか、若し然らば、長白山東方の民族に、眞又はこれに相當する字音の國號を見出し候事は、緣由之れなしとは申がたかるべし、小生はかく想像いたし候、その東眞（東夏は問題に非ず）又は大眞の何れかについては、既に弓裔の摩振（マジン）も有之候事故、大眞說に従可申候も、東丹の例も有之候間、民族内に東眞と自稱せしに非ずや、大と東との差別は貴說にとりては、重要觀點に拜見い

たし候へ共、小生は専ら振(震)國の繼承に重きを置き度存候、從而天泰を道家言より撰擇するの必要も可無之候。

小生は尙軒君等の開元説につきても、一致し得ざる者有之候、貴文庫藏の大典站赤を拜見し、又た去年間島龍井より、開元路退毀昏鈔印一顆發見せられしより、一層此感を深め申候、尙軒君始め諸君が、開元路を論證せられ候て、何故に大典記事を使用せざりしか、今に疑義を懷き居り申候、蓋し渤海が唐の正朔を受けしは、開元初年に始まり、唐朝文物衣冠はこの頃をもつて、黒水靺鞨に浸漸す、所謂開元路中には、開元城と稱せられし舊地名を存せしに非るか、かやうにも臆測仕候、御高見如何に御座候哉、創業開國の君は、多くの場合舊慣を採りて標幟とするやうに見受け申候まゝ、かゝる解釋を、専ら歴史的の繼續性に相求め申候、云云(後略)。

右の玉簡に於いて、博士が從來の東眞、東夏の兩説を捨て、大眞説に賛意を表され、卑見を支持し、方外の讃辭を頂いたことは、自分は唯だ恐縮してゐるばかりである。博士の懇切なる高教に對しては、自分はまた重ねて言ふ、滿腔の敬意と深甚の感謝とを捧ぐるに、決して吝かなるものではないことを。然しながら御來旨の一二に就いては、直ちに承服し難いところあるは、寔に遺憾とするところである。

博士にかすに相當の紙面を以てし、悉すに詳述を以てされたならば、或はまた納得も出來、從つて自分の考も變るかも知れない。またこの短い箋惠に表はれた部分だけで論ずることは、こと或は博士に對して非禮に屬するかも知れないことも、能く承知してゐるけれども、一言辯ずることを寛恕され度い。

唐代渤海國が振(震)國と言へること、またその典據、易の震より出で、東方を意味せることは、自分は既に一言觸れてゐいた(拙稿六)。そこで問題は弓裔

の摩震であるが、自分はいまこれに就いて、二様の解釋を有つてゐる。摩は摩訶の略にして、その意「大」なることに於いては、幸にも自分も稻葉博士と同意見である。

また震に關して、振・震・眞共にその音 *chén* であつて何れも同じであることは、自分と雖も少しの異存もない。たゞ博士は以上三字同音なるところより推斷され、「長白山東方の民族に、眞又はこれに相當する字音の國號を見出し候事は、緣由之れなしとは申がたかるべし、小生はかく想像いたし候」と言はれてゐる。渤海は女眞民族であることは言ふ迄もない。ところが弓裔は新羅人で韓民族である。或は辯解されるかも知れぬ、治者弓裔は韓人であつても、被治者たる土民は、多く女眞民族であつたと。然し新國家創始者が、苟くも國號を建てようとする際、被治者民族中にこれを求めて設定することが、あり得ようか、頗る疑問なきを得ない。書中に明記ある

如く、固より博士の想像であつて決して斷定はされてゐない。けれども頗る婉曲ではあるが、自分の「大眞」を道教經典より採れりとなす考に、不滿を懷かれてゐることは確かである。その證據には後段に於いて「大と東との差別は貴説にとりては、重要觀點に拜見いたし候へ共、小生は専ら振(震)國の繼承に重きを置き度存候、從而天泰を道家言より撰擇するの必要も可無之候」と非難されてゐる。自分の主張の最も力點たる「大眞」とは「大金」の意味を異字で表はさうとした萬奴・王濬等の苦心のあるところ、萬奴の完顔宗族出身と自稱せる點などと思合せての議論に對して、御示教の言及されなかつたことは、自分にとつては、返へすゝも殘念である。「大と東との差別」も卑見に於いては、御察しの如く重要觀點の一ではあるが、それは箭内博士の説を批判せる條に於いてである。自分の強調力説せるところは、「仙方」の「名金爲大眞」と言へる記載と(拙稿五、八頁)、「黑韃

事略」の「即女眞、大眞國」の記述が、他の校本に在つては、「即女眞、大金國」とある等に據つた諸點に存するのである(拙稿五、九頁)。

さて弓裔の摩震であるが、博士の考へらるゝ如く、自分も渤海國號と關聯して説く一つの考を有つてゐる。摩震は摩訶震即ち「大震」であることは、博士の言はる通りである。不幸博士はその意を説かれぬ。自分は渤海の場合と全く同じく、震を東の意と解し、即ち「大東」とし、後に朝鮮の自稱となる「大東」の意かとも解せられないでもないと思ふ。

次にもう一つの自分の解釋はかうである。摩震とは「摩訶震旦」の略稱であらうと信ずる。といふのは弓裔とは新羅興教寺の僧善宗の俗名であること、自ら彌勒佛の化身と稱し、外出には常に童男童女をして、幡蓋を奉じ、香花を持して前導せめ、二百餘人の比丘を後に隨へて梵唄を唱へしめたこと、長子を青光菩薩、末子を神光菩薩となした(金富軾撰、三國史記卷五十列傳、弓裔傳)

「蒲鮮萬奴國號考」補正

條裔の)などのことから、しかく考へたのである。

朝鮮に國を建つる者の常として、支那を半島に於いて實現せんとする理想を抱懷してゐることは、幾多の例を擧げることが出来る。少くとも王朝始祖の抱負としては、その位の大經綸大理想を腦裏に描いてゐるのが、當然のことであれば、佛僧出身の弓裔のことであるから、佛典に通じてゐたであらうことも、想像に難くはない。されば道宣の「續高僧傳」卷第二、「達摩笈多傳」に、

北路商人頗至_ニ於彼、遠傳東域有_ニ大支那國焉。

舊名_ニ眞丹_一振旦_ニ者、並非_ニ正音_一、無_ニ義可譯_一、惟知_ニ是此神州之總名_一也。(大正藏第五十卷、史傳部二、四三三五頁上段)

とあることも、唐太宗朝、法琳の「辨正論」卷第六に「婁婁經」を引用して、

葱河已東、名爲震旦、以日初出曜於東隅故稱震

旦。(大正藏第五十二卷、史傳部四、五二五頁中段)

と記してゐることも、承知してゐたであらうと考へ

られる。若しまたこれ等の史料を直接見なかつたとしても、これ等の史料の依據せる原の何かについて知つてゐたであらうとも考へられる。かやうに考へて來れば、弓裔が國號選定に際して、「摩訶震旦」即ち「大震旦」を腦裏に想起し、以て「摩震」と稱したのであらうと推定しても、決して無稽の鑒言ではあるまいと信ずる。

以上二つの考に就いて、孰れが是か、何れが否か等の考證に關しては、後日稿を改めて細説するところあるであらう。

最後に博士は、「開元路」問題を提げて、箭内博士初め、池内博士、和田學士等の諸先生が、永樂大典を使用せざるを疑はれし後、(稻葉博士、元開元路退邊管鈔第三號六八―七八頁。昭和六年二月にても既に公表されてゐる)愚見を問はれてゐる。

この問題に關しては、自分は既に明かに自分の態度を記してゐたつもりである。開元の地理上の位置に就いて、これを決定せんと試みようとするもの

ではないと。「開元の名が萬奴の獨立に聯關して、始めて史上に記錄されし都城名なることは、「元史」地理志の「開元之名始見於此」と明記ある以上、これ亦その命名には、王濬等の議に參畫せること最早や疑ない」。果して然らば「開元」の字面も、他の諸分子と共に思合するとき、また既設の諸分子が道教に基因を有することゝなるとすれば、これ亦頗る道教的色彩の濃厚なるものあるを、暗示してゐると考へるものである。」と前回に於いて書いて置いたのである。

併し稻葉博士の説かるゝ如く、唐の玄宗の開元と關係して説明せらるゝならば、玄宗の年號開元こそ、玄宗の玄字と共に、道教より出でしこと、周知の事實であつて、一層卑見を裏書することゝなる譯である。けれども自分はいさ遠かに、萬奴の都城としての開元が、果して唐代の舊地名の地方的に残つて使用されてゐたのであらうと推測せらるゝ稻葉博士の主張さるゝのそれに關係あるかどうかを決定す

ることは、明言することは出来ない。暫く検討を後日に譲ることゝしたい。

王濬傳並に王濬と萬奴との關係の項

(本論第八章)

昨年夏に、畏友大連南滿工業專門學校教授工學博士村田治郎君が、懇切なる私信を以て在滿島田好氏が、萬奴の遁入せる海島に關して一説あり、既に公表されてゐる旨を報じ、自分の注意を喚起した。指示の雜誌「滿蒙」(第七年第七十四冊、大正十五年六月一日號九七一—一〇〇頁)に就いて、これを見るに、その梗概はかうである。

島田氏は、萬奴の遁入せりといふ「元史」に見える海島を以て、遼東半島復縣西南海岸に横たはる長興島に擬せんとしてゐる。その理由として、島中黃山(一名大孤山)に石城が残つてゐること、そしてその城中に一つの古井があり、その井戸の口に「天王」の二字が鑄られて現存してゐる。これを萬奴が自稱せ

し「天王」と結び付けて、その遺跡ではあるまいか、との新説を立てられ、これが證據として、小川博士の間島に於ける雲頭城址發掘採收の「天」字、「王」字の瓦を擧げてゐる。

これを讀み了つて、自分はかう考へた、他に一切の文獻がなく、遺蹟遺物の援助だけで決定して差支ない場合とすれば、この説或は成立つかも知れない。然るに萬奴のこの場合を、しか認める爲には、幾多の史料との矛盾を解かねばならぬ。

萬奴の海島遁竄中は、自分の考に従へば、萬奴の天泰二年(元太祖十一年丙子、金宣宗貞祐四年、高麗高宗三年)晩秋から、翌天泰三年(金宣宗興定元年)春雪融け迄の間である(拙稿七頁)。而して海島より半島に戻りし後同年夏四月、大夫營を破り、鴨綠江を渡りて義州に入り、婆速路境を侵して、高麗國內上下をして震駭させてゐる。この事は前回詳説した通りである。(高麗史、高宗世家、「金史」(拙稿七頁)宣宗本紀及び同阿里不孫傳(三頁))

果して然らば、何物をも凍結させずにおかぬといふ滿洲の冬期間に於いて、長興島に築城したり、鑿井したりする工事が出来得たであらうか。それに「天王」の二字を刻したりするだけの心の餘裕があつたであらうか、疑なきを得ない。況や何時木華黎の率ゐる蒙古軍が、追撃し來るやも計られざる、背後に迫れる不安あるに於てをやである。

それのみではない。若し遼竄地を長興島とすれば、「金史」の宣宗本紀、興定二年夏四月壬子「十一日」の條、及び同「完顏素蘭傳」に見えたる萬奴の行衛を察訪せる記載と、合致しなくなる（拙稿七頁五頁）。即ち宣宗の完顏素蘭に與へし詔諭に、

萬奴事竟不知果何如、卿等到彼當得其詳、然宜止居鐵山、若復遠去、則朕難得其耗也。

とある。萬奴海島に入りしと聞ける金室は、その鎖鑰たる鐵山に到つて調査せば、必ずや萬奴の消息も判明するならんと、如上の詔諭を發したのである。

この鐵山に就いて、箭内博士は旅順老鐵山に擬せられしことの非なるは、前回考證した通りである（七頁）。この鐵山こそは朝鮮鳴綠江口東南に横たる假島（皮島）對岸の鐵山に外ならぬ。宣宗本紀、素蘭傳共に、この詔諭の直後に、「高麗互市」の事を記してゐることも、金州半島附近に通入海島を求められぬ理由の一つである。

終りに臨んで、羽田・稻葉兩博士の懇切なる叱正に對し、村田博士の友愛なる教示に對し、謹で謝意を表し、併せて妄評に對して諸賢の寛宥を禱る次第である。（昭和八年一月二十二日稿）